Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

048

ヤングペアレント育児を支援する構造の探求

畠瀬直子
（関西大学　文学部）

研究目的

明るい２１世紀作りを夢見てきた私たちの前に、幼い子どもが巻き込まれる多種多様な事件が出現し、ひとつひとつを真剣に直視すると無力感に陥りそうな現実がある。特に、カウンセリングの現場では切実な来談者の内面的叫びを受けとめるので、未来に向かう心理的動きが生まれ出すのを支援する作業に集中するわけだが、同時に研究者間の提携が必要だと痛感する。本発表は、幼い子どもを守る日常業務の中で多様な保育行為を展開している現場の研究者と直接の連携を築くのが第一の目的である。第二は、発達したマスコミのおかげで事件発生を知らされるわけだが、ややもすると若い親の未熟さを告発することに重心が置かれ、人間心理のポジティブな側面であるその未熟に見える親の内面に存在する自己実現志向、つまり成長したいというかすかなうごめきは切れ捨てられている事の重大さである。本当にかすかとしか言えないその内面を大切にする方向性が必要であることを主張するのが第二の目的である。第三は、子育てとか結婚に希望や挑戦を感じるよりも、不安と難しさを感じる若者心理を伝えることである。若者の気持ちにアプローチすることなしに、少子化進行を施策だけで改善することは不可能である。第四は、現段階で考えられる支援システムの提案である。

なお、本発表は、文献研究、アンケート調査、体験報告などの統合的考察による質的研究である。

生命を迎える意欲がわかない若者の現状

長年大学で若者と向き合い、自由記述で内面を語ってもらい集めた資料を総合すると、そこに新しい生命を抱きとめることへの深い『おびえ』を認めざるを得ない。生命を迎えることへの懐疑は、実は３０年近く前から見られ始めていた。現在は、《子どもが欲しい》対《欲しくない》の比率は《73％》対《27％》である（関西大学での結果）。親になった場合を想定すると、育て方が分からないし子どもの未来が不安（73.4％）、経済力がない（64.5％）、精神的に行きづまる（60.5％）と感じている。子どもが欲しいと考えている若者も親になる不安はおなじである。

また個人の選択・自由・多様性を尊重し、各自の責任意識を重視している。また、現在の少子化現象を改善していく意欲は低い。家族を作ることこそが自然と考える若者は激減し、家庭と仕事の両立には夢を持てないと醒めた判断をしている。その背景には根深い自己嫌悪感情が見え隠れしている。自尊感情が低く、親になることで人間として認められるとは考えていない。生命の歴史を受け継ぐというアイデンティティーは、完全にゆらいでいる。

ヤングペアレント支援システム

出産年令の高齢化が進んでいるが、これは生きる長さが10年以上延長したので自然な動きといえるだろう。一方、十代の出産もあり、経済的不安定さは言うまでもなく、核家族化した今は援助のないままに孤立している。多くのヤングペアレントは、家族ぐるみで自分の親の庇護を受けている。それでも、子どもを公園に連れていったりすると、他の親は30代なので接点を得ることは不可能と感じてしまう。親になるべき年令ではないという人々の視線も圧力になっている。出産平均年令が25才だった時代には想像もつかなかった人間模様が展開している。熟慮の上で子どもを生んではいないヤングペアレント支援シェマを考慮に入れて関わることが私たちには必要である。

①生活基盤の支援……核家族化した大都会では、安心して暮らせる住居を確保できないという不安を若者は感じている。過密日本の現実はヤングペアレントには厳しすぎる。あらゆるデーターが示すように、未だ熟練した技術・態度を持ち合わせない若者は安定した職業を得ている比率は低く、出産は一時的に収入の半減を引き起こす。世界第二の経済大国とは思えない不安定な経済状態にある。それでいて、おしゃれを楽しめるささやかなゆとりがないと生活に支障がでる心理的内面を抱えている。

②育児労力の支援……研究に取り組んでみて、臨床心理学の枠組みを越える必要を感じたのは、具体的援助を求めているヤングペアレントの実態

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

である。「子どもをほっておけない⇔自分の時間が欲しい」、「ノイローゼになりそう」という内的欲求は、具体的に援助される必要がある。また、母親の内面には、「子どもを持ったことによって将来がたたれてしまう不安」が大きい。19才、20才では、大学で学んでいる友人を意識せざるをえず、内面的葛藤は極めて高い。一日3時間の自由時間があったら自分をコントロールしていけると感じている。

③社会化欲求の受容……カウンセラーや小児科医のような信頼できる人間関係を求める欲求よりも、同じ様な仲間との交流を求めているのが特徴である。これは健康な社会化欲求ということができる。日頃の緊張をといてのびのびしたい気持がにじみ出ている。親としては若すぎるという周囲からの視線から解放される重要な要因として機能するだろう。どこに行ったら仲間に会えるのか、皆目見当がつかないと悩む現状がある。

④関係性を豊かにする支援……家族とゆとりある関係を築く時間を持つ人が少ない厳しい社会である。子どもと二人で過ごす生活をスタートすると、夫婦の愛情まで自信が持てなくなりそうな気持に押しつぶされそうな現実が展開している。追いつめられて夫婦の愛情を見つめ始めるのだが、手掛かりがつかめない。子どもとの関わりも豊かにしたいと思うが手掛かりがつかめない。自分自身の体験的蓄積から浮かび上がってこないのである。支援にはカウンセリング理論の援用が必要と言える。

⑤個性化欲求の理解……長寿社会に於いては、子育ては自分の人生の一部であり、子育てを人生の中心には位置づけにくくなっている。ヤンママと言われる極めて若い無謀な子育てをしているかのような母親とのインタビュー調査でも、夢を忘れたくないと考えていることが浮かび上がっている。自己実現という言葉を持ち合わせなくても、確実に自己実現欲求が息づいている。

支援シェマの現実的応用

幼い子どもを守る基盤となる生活基盤、育児労力、社会化欲求の三条件が貧困であると、親のセルフコントロールが失われ、子どもに不満が投げかけられることになる。家庭内暴力発生構造で明確になっているように、普通なら気にもとまらない小さなしくじりが感情暴発の誘因になってしまう。現在社会が緊急に必要としているのは、暴発回避である。基盤となる三条件が満たされると、関係性を豊かにする内面的動きが自然に展開する期待が持てる。それこそが人間に普遍的に認められる自己実現欲求であるから。

①親となった若者の心理的成長をサポートする視点……「あなたはもう親なんだから」と諭され、どうしていいかわからないまま問題が大きくなったケースが多い。親もゆっくり成長すればよい。

②政策マニフェストに育児労力サポートを入れる……親が一人っ子どうしもあり、援助を受けられない事例が多い。社会的工夫が求められる。

③生活基盤の支援を急ぐこと……ヤングペアレントの生活基盤は脆弱である。彼らの親も基盤に欠けていることが多い。食に事欠かないため目立たないが、豊かな社会に於いては内面的葛藤が高く見逃せない。

④交流会の企画……ピア・グループ（同じ課題を抱えるメンバーの交流を活用するグループワーク）を活用した孤立脱出の交流会が有効である。

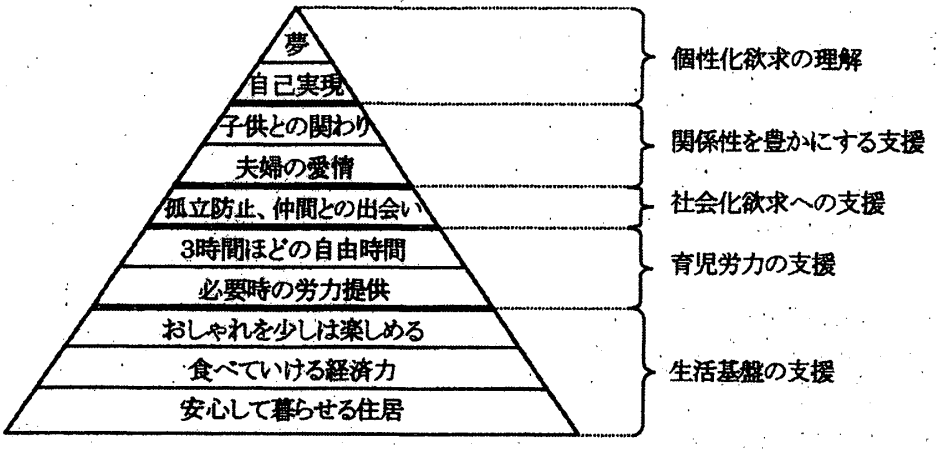

図1 ヤングペアレント支援シェマ

NII-Electronic Library Service